

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2470600418		
法人名	伊勢温泉観光株式会社		
事業所名	グループホームにのみの家		
所在地	津市新家町-1488		
自己評価作成日	平成26年6月5日	評価結果市町提出日	平成26年11月13日

※事業所の基本情報は、介護サービス情報公表システムページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaisokensaku.jp/24/index.php?action_kouhyou_detail_2014_022_kihon=true&JigvosvoCd=2470600418-00&PrefCd=24&VersionCd=022
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 三重県社会福祉協議会
所在地	津市桜橋2丁目131
訪問調査日	平成 26 年 7 月 14 日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

「自宅」ではないが、自分の家のように気兼ねなく、ゆったり、くつろげるもう一軒の家、それが目ざすグループホーム「にのみの家」の筈です。来年迎える開設10年を思う時、「初心忘れるべからず。」もう一度オープン初日のあの感動と緊張を想い、志を新たに、自覚と責任感を持って再スタートを切りたいと思います。これまでに沢山のことを学ばせてもらいました、利用者の皆さんに感謝し、反省を忘れず、更に1ランクも、2ランクも上のグループホームを目ざし精進したいと思っています。地域の一員としての交流を深め、貢献ができるようつとめたい。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

閑静な住宅地にグループホームに開設して、来年10年目を迎える事業所である。敬愛の念を忘れず心穏やかに笑顔で暮らせる「おうち」を目指し、工夫・努力している。隣接するお寺での四季折々の花を鑑賞することができ、利用者の散歩コースにもなっている環境である。地域の方々の理解を受けて、地域の方々との触れ合いを増やすように心掛けている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが広がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	ホームから特養に移られる時のご挨拶で「ここでの〇〇ヶ月が今までで一番幸せだったと思います」とのお言葉に胸が熱くなったと感動を抑えられない職員。理念の実践を体で実感した瞬間です。	「和顔愛語」の言葉に沿って、利用者ひとり一人と向き合い、心のこもった優しい支援に管理者・職員が努めている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営母体が地理的に離れており、大きな行事である夏祭りなども、こちらから全員そこへ出向いて参加しており、十分とはいえない。事業所としても更に工夫し、交流促進に努めたい。	自治会に加入しており、地域の行事への誘いもあるが、利用者の重度化で参加するのがむずかしくなった。しかし、事業所周辺を散歩し、利用者や地域の方々との触れ合いを心掛けています。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の民生委員様と話し合いをもつなど、地域貢献を模索しているが上の項と同様未だ不十分である。情報交換につとめ貢献の実を挙げられるよう努める。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議委員の方々の理解、協力のもとに、頂く諸意見、所見を活かしサービス向上に努めていく。	6月に開催され、自治会・包括センターの参加を得て、状況報告や情報交換等の意見をもらって改善に繋げている。また、利用者家族・地域の方々を巻き込んだ会議になるように検討している。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	保険制度も改正、変更が多いが現場では情報の収集、確認に遅れる心配がある。常に行政担当と連携を密に、相談、指導を俟ちながら手抜かりのないよう努める。	行政には、電話等で相談し、指導を受けている。援護課からは、入居の依頼を受けることが多く、積極的に受け入れをし、協力関係を築いている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	虐待と身体拘束禁止の心を、理念に照らし確認し、実践に疎漏なきよう、職員会議、その他機会あるごとに話し合っている。決まりとして理解するだけでなく信念として実践できるように努力していく。	管理者中心に職員全員で拘束しなくてもよいように職員会議等で話し合いを重ね、どうしたら自由でいられるかを日々検討し実践に繋げている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見逃されることがないように注意を払い、防止に努めている	つい犯しがちな例を挙げながら、虐待について話し合うことは大切で、多くを学び、気づくことが出来る。虐待の疑念のある行為について常に、学ぶ機会を持つよう努める。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	アドボカシーの課題は、高齢による心身の変化に伴い俄かに現れる、身体の状況、家族の状況によっても対応が異なる。事例を参考に学んで行きたい。(後見制度利用者が入所者中に居られる)		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	老人施設の利用が必要になったとき、利用者、家族それぞれに不安が先立ち、判断に悩まれることが多い、聴取、説明を十分に尽くし納得が得られる様心掛けている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の面会時、計画作成のため意見を求める時、など機会を捉え率直な意見感想など聞けるよう配慮を心がけている。	にのみ新聞郵送時に利用者の状況等を知らせている。家族には、面会時に思いや意見・要望を聞ける機会を設け、職員会議で話し合っ対応している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	毎月の職員会議、リーダー会議における職員の意見提案など、毎週2回の代表者との意見交換の場で取り上げ、上申、運営に反映を図っている。	その都度、意見・提案を管理者に言える関係づくりができています。また職員会議等で意見を吸いあげ、研修等を行い質の向上に努めている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	就業規則、諸規定、職場環境の整備、点検を行い、職員それぞれが向上心を持って、仕事に邁進できる様努めている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	利用者の高齢化には、必然介護者の資質の向上が要求される。内外で催される技術の講習参加は言うに及ばず日常の業務のなかで考え学ぶ心を育てていかなければならない。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	同業者との交流によるサービスの向上への期待は大きい。より良い介護、「利用者本位」の実践に向けて向上心の喚起を図っていききたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	ここでも「利用者本位」。言葉に矛盾のない関係作りから始めなければならない。不安を取り除き信頼関係を築き、心の声に耳を傾けるよう努力している。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	導入する時のサービスは、まず本人、家族の不安を取り除くこと、安心した信頼関係ができること。取り組んでいる。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所サービスだけに限定せず、広く、本人、家族の希望、要望を聴き、適切な対応を心がけている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する側、される側、そこに思わぬ隔たりと、距離感を覚える。ともに仲間同士と言う近しさが感じられるようになれば本心からの言葉が聴けるようになろう。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人の思いを最も良く知るのは家族のはずである。長い生活の歴史を知り、理解することで本人の思い、家族の思いも伺い知る一助となろう。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	本人の馴染みの人、場所のほのかな記憶が現在の安心感、充実感となって心が満たされるように思われる。記憶の維持を補助して行きたい。	利用者ひとり一人の希望に合わせて、馴染みの店への買物等を支援している。また家族との外出など関係をつなぐ支援にも努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	お互いの会話は成り立ってなくても、何時も寄り添う人達がいる。寂しさ、心細さ、を埋めあっているかのように見える。支えあう関係作りを支援していきたい。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後、職員が転居先(移られた施設)を訪問することは多い断ちがたい心のつながりと思う。元気な姿を確認して職員同士語り合うシーンは温かい。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	それぞれの思いや意向の把握なくして、「本人本位」のサービスは望めない。安心し、自ら進んで話せる場を作り、聞き取るに努めるのはもちろん、ふとみられるしぐさ、表情からも読み取る心配りが必要となる。	利用者に寄り添い話を聞いたり、表情やしぐさから思いや意向を把握するよう努めている。また心の動きが読めるようノートに記載し全職員が共有している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居に先立ち家族、本人と充分話し合い、相互に理解を深め、安心感が得られるよう、持ち物の準備と同様「気持ちの準備」が必要となる。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	慣れるにしたがって、見落とししたり、見逃したり、気付かなかったり、しかなない危険がある。見る目、気付く心、を忘れないよう話し合っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	各ユニットの職員会議において、介護員皆の意見医師の往診時の所見、日ごろから伺っている家族からの意見、希望などを反映した、本人本位の計画作成に努めている。	定期的には3ヶ月毎に行なっているが、各フロアで毎月のケース会議で評価し検討されている。状況等変化ある場合は随時見直しが行われている。家族意見・希望を反映させ介護計画書を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	日々のケア実践の中で気付いたこと、特に変化、変えた対応の効果、反応など記録にとどめるのは勿論、申し送り共有に努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	事業所の多機能化の意義は充分理解しているが、体制面で即対応が困難とおもわれる。予想される可能なサービスについて、検討をしていく。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	高齢に伴う心身の変化は、 possible の領域を等しく狭めつつあり、行動の範囲も制限を余儀なくされている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	協力医の往診があり、安心して医療が受けられる体制にある。ただ、入所以前のかかりつけ医をそのまま指定される場合もある。	協力医受診がほとんどであり、月一回の往診がある。従来からのかかりつけ医での受診もあり、家族と共に職員が同行し医療の連携を大切に支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	看護職の配置がなく、協力医に対応をお願いしている。利用者の高齢化は看護師配置の考慮を促すことになる。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	お互いの会話は成り立ってなくても、何時も寄り添う人達がいる。寂しさ、心細さ、を埋めあっているかのように見える。支えあう関係作りを支援していきたい。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に、重度化した時の事業所の対応について説明し、終末期医療の限界についても了解をいただくと同時に、その時に備え、特別養護老人ホーム等適切な施設の紹介等理解をお願いしている。	家族には、契約時に重度化対応の話をしている。医療行為を伴うことについての対応ができない為病院・特養に移動をお願いしている。ここで最後までとの希望もあり、職員の看取りの意識も深まり実施したいという考えが見られる。	協力医とも相談のうえ、事業所としての環境を整え、看取り実施に向けて期待する。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	AEDの操作、取り扱い方の習熟が緊急時に備え必要となる。誰もが何時でも対応できるよう学習の機会を予定している。(火災避難訓練時)		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年月が嵩むに従い利用者の心身の力の衰えは顕著になり、避難は極めて困難と思われる。避難方法と練習を工夫し事故のないよう実施を近々予定している。	消防署の指導での防災訓練を実施している。職員は、避難方法など災害に注意している。また備蓄等も検討されている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	プライバシーの確保は個室であり、注意することでほぼ保たれる。人格の尊重の観念は馴れ、親しみの感情とともに心ならずも忘れがちである。職員同士、戒めあいながら努めたい。	特にトイレ誘導時のことばかけや、入浴介助時のプライバシーに気をつけながら思いやる気持ちで支援している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	成るべく利用者のペースに合わせ意思の表出を待つよう心がけ、思いや希望を聞き取るゆとりを取るよう心掛け、自己決定を促していく。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	先の項に同じく、一人ひとりの希望、ペースにあわせことを運ぶ心配りはその人の自尊心を助け生活に意欲を起こさせることにつながると思われる。こうした支援をこころがけてゆく。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	その人らしい身だしなみやおしゃれがその人の生気を呼び起こし、生活にはりを持たせる効果が言われている。楽しみの一つとして試みたい。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	楽しみの少ない毎日の中で、食事は最大の楽しみになっている。できるだけ明るく楽しい雰囲気の中で味わってほしい。	献立・材料は業者に委託しており、献立をもとに各フロアで職員が調理している。職員は見守りながら食事介助をしている。また、月一度外食に出かけ食べる楽しみの支援も行っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養、水分の摂取については、医師の指導に沿って、量の管理、記録に努め、適量摂取を心がけている。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、それぞれの能力に応じ、それぞれに適した支援、援助の方法で口腔ケアを実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	おそらく排泄の失敗や介助を受けねばならない心の痛み(?)は想像に難くない。生きる気概にも繋がる排泄、個々のデータを参考に支援を工夫し自立に結び付けたい。	排泄パターンを把握し、日常のかかわりの中でのごく自然に気をつけ、トイレでの排泄を支援している。居室にトイレ・洗面台が設備され気兼ねなくゆっくり排泄できる。オムツであった方が支援することで布パンツに改善されたケースもある。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	ただ薬物に頼るのではなく、食事の形態を工夫したり、一日の運動の量を考えたり、生活の習慣を見直したり、その人に合った方法を見出す努力も試みる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴時間の設定は、介護員の勤務体制、設備、入所者のその日の状況、気分等に左右される。「利用者本位」の原則に照らして、可能な方法を見出し、入浴がエンjoyできるよう努めたい。	毎日風呂は沸かしている。ひとり週3回入浴支援を行っている。入浴剤を使いこち良く楽しめる入浴タイムに努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	睡眠の問題は高齢者にとって特別ではない。動き、刺激の少ない生活に、心と身の疲労のバランスが取れないことが考えられる。生活習慣、環境、等模索している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	医師、薬剤師の助言、指導をもらい、薬剤の服用についての基礎知識を身につけるとともに、服用の注意点を守り、服用動作の確認、反応にも注意を怠らない。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	塗り絵の好きな人、トランプ、絵合わせ、記憶、しりとり、それぞれに、秀でて得意な人がいる。得意なものだと目が輝く、一日、満足そう。それぞれの得意を覚え、元気になるカードをさがす。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	思いついたように欲求が出る。近いところならひとっ走り。できる限り要求に応じる。行けない時は散歩。それでも戸外を季節の花を見ながら歩けるのは最高。隣のお寺の庭を自分の庭のように。職員と利用者さんとで心から感謝。	利用者の突然の要求にもなるべく応え、買物支援等に行くこともある。隣接するお寺の四季折々の花を鑑賞させてもらい五感を感じえる支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	「お金がお守り」なければ不安。「持っていないけりゃ」と言い張った人も今は。一年もたてば執着も抜ける、喜ぶことではないかもしれないが苦労が減ったと思えば、		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	本人の希望、家族の意向をただし、電話の取次ぎや、手紙のやりとりのお世話をしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	利用者の居場所としては、自室、ホールで過ごされることが多い。ホールに季節の花を飾り季節感に触れ、みな作品を掲示するなどして、明るさの演出に心配りをしている。	利用者が過ごす時間が長いのがリビングである。畳コーナーにはテレビが置かれ、くつろぎのスペースとなっている。壁には利用者が作った季節の作品が飾られており、メニュー・利用者の写真等も掲示されている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	共用の空間に乏しいが、花壇をつくり、季節の花を植えたり、野菜を育てるなど、試みている。駐車場の一角に、チェア、テーブル、パラソルなど配置、にわか作りの納涼コーナーをこしらえ、開放感を味わってもらっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	どの部屋もそれぞれの趣向、好みにあわせ、その人らしい雰囲気や漂わせている。思い出の品々に触れることで、安心と落ち着きが得られているようだ。	トイレ・洗面台・ベット・たくさんの収納棚が設備され、床・壁面・入口が木目調で落ち着いた感じである。また、利用者が心休まる様々な写真など飾られ、それぞれの思いの設えになっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	間隔のある手すり、背伸びがするちょっと高め衣装だな、のぞき窓、トイレのやや低い握り棒、工夫によって、思わぬトレーニングマシンとなる。		